20代、あの頃私は……研究と青春

「会社から離脱！リスクを冒して研究者の道へ　研究と青春」

新海哲哉

祖父や二人の叔父兄弟が、地方で「開業医」をして、勤め人ではなく「職人」として他人にあまり依存せず生きていたのを見て、高校時代はまったく勉強せずにいたにもかかわらず、「私も、できは悪いが「風邪と腹痛でも」診て飯を食いながら、地方で「小説や随筆」でも書いて自由気ままに暮らしてやろう。」などと甘く考え、無謀にも「医学部」に入り、ヤブ医者になろうと不徳な決意をしていた。しかし、高校入学以来、奨学金で映画を、洋邦画を問わず年に100本鑑賞、ロックバンドのボーカルに現を抜かすなど怠けに怠けていた高3の私にあったのは、「医学部に入れる学力をつける努力の才能や学力」ではなく、「無謀な決意と根拠のない自信と自己肯定感」と色気と彼女で、家は母子家庭でカネもなく、現役は高校近くの公立大学の医学部を「記念受験」して、落ちるべくして落ち、賢明な彼女には18歳の誕生日を最後に、フラれるべくしてフラれた。

当然、浪人しても、高校の多くの同級生が入塾した大手予備校のK塾にも、カネがないので入らずに、Z会の通信添削と受験参考書頼みの我流の勉強だけの宅浪で1年を費やした。受験のノウハウや効率的な時間配分もない我流ではできず、けっきょく1期校は、地元の名門で叔父が卒業した国立N大の医学部を受験して桜散り、滑り止めで受けておいた私立N大学の経済学部に入学したが、在学しつつ「仮面浪人」して、1期は再度国立N大の医学部を受験して敗退、2期校も青森県の国立H大学の医学部もちゃんと落ち、N大の単位もとれず、留年決定し24歳で「1浪1留」してN大を卒業。名古屋市の公務員試験の筆記は合格したものの、癖の強さからか面接で落ち、地元の中小企業に営業社員として入社し勤務。その後、「俺はサラリーマンで生きるのは、とても無理だ。」と判断して、私立N大時代に「大学院進学しては？」とのお誘いを自ら蹴ったくせに、その誘ってくださった恩師を訪ね、大学院の修士課程に27歳で進学。さすがに「退路」を自ら断ったので、「死に物狂い」で勉強（土日祝日、夏季休暇、春期休暇以外は、塾講師のバイトとマンツーマンの大学院の授業準備で睡眠時間5時間）。

その後カネもないので博士後期は公立N市立大の大学院に編入し、D1で投稿した論文が日本のある学会誌に単著で掲載されODなしの公募で、縁あって立命館大学経営学部に助教授で採用されたのが32歳だった。ちなみにそのとき経営学部で同僚となったのが、現在でも同僚である次期経済学部長の豊原法彦教授である。また、同大学で学部は異なるが同僚であった、その後さまざまな形で刺激と学恩を受けているのが、大阪大学経済学部の阿部顕三教授、二神孝一教授、堂目卓生教授である。おそらくこれらの先生方にとって私は、困った「腐れ縁？」だと思っておられると思うが……。

これが18歳から32歳まで波乱万丈でリスクに満ちていたが、果敢に過ごした激動の青年期の中で、27歳から32歳までが「私の遅まきの青春と研究の日々」であり、学者として気ままに生きる「獣（けもの）道」を生きる現在の私の礎となった。